戸辺秀明

一九五〇年代沖縄教職員会の地域「診断」

戸辺秀明

一九五〇年代沖縄教職員会の問題構制を中心に

はじめに

戦後沖縄の復帰運動を論じる際、沖縄教職員会（以下、教職員会）の存在は欠かせない。一九五〇年代の復帰運動は、教職員会が運動の中枢に在ったと言われる。しかし、彼らのなかで、復帰運動への動因、すなわち日本国の主権下への復帰を標榜するという立場によって、米軍支配から脱却しろという主体の構築をはかる意志（本稿ではそれを復帰志向と仮する）がいかに形成されたか、そしてそれを支える活動がいかなる実態を持ち、いかに正当性を獲得したのか、かれなどの社会運動史として考察する場合には、社会運動史として考察する場合には必須の課題について、明らかな問題提起として、一九五〇年代の教職員会の研究・文化活動の実態を把握し、新たな知見を提示する。具体的には、五四年から始まった教育研究集会（以下、教育研究集会）の先駆的な分析が、六〇年代後半に革新化しつつあった教職員会への共感から、米軍政下ゆえの教育の変則性を擁護する勢力をとっており、それがために教職員会の日丸・君が代・標準語の使用に現われる同化に関する分析も（危惧を呈しつつもある）。教職員会の歴史的特性を強調し、本土（日本）中央の価値基準で観る分析を絹めつつも、革新国民運動に合致する限りでのナショナリズムの積極的評価を主調音であるといえる。従来のこうした傾向を相対化する新しい視点を社会学から導入し、
明治四十七年

のは、九〇年代後半の小熊、猿谷の研究であった。いずれも教員の同化に対する復帰運動の問題性を鋭く指摘している。

第一に、両研究とも、戦後沖縄の同一性構築に際して「境界」に現れたイディオギー構成の典型例としての職員会を分析し、教員たちは同化の歴史的過程を明快に指摘している。その結果、国語教育や国教教科会の報告内容に分析の拠点が示された。これらを教員活動の全体が、位置づけられていない。しかし、五〇年代という初期教員の時代条件は全く等閑に付けられている。しかし、時代性には、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆえに、復帰志向の存在感は大きい。それゆる年代の沖縄像が、教員たちのいかなる危機感を映し、復帰志向へのどのような位置・割合を占めていたのかを明らかにしたい。特に、第二次教育像を構成し始める経線と分科会構成に多くの紙を割るの他は、このような問題発見からすればゆるかせにできないからである。

第二に、両研究は、教員の文化教科会の「九〇年代の沖縄像を構成する経線」と分科会構成に多くの紙を割るの他は、このような問題発見からすればゆるかせにできないからである。
同時期の市場の内訳との関係を精査しながら、こうした連続的、具体的な振興の必要を感じていた児石は、帰任後、早速教職活動へとりくみを提起する。次いで四五月までに、日教組教職員会の

二度にわたる代表派遣や九州中学校長研究大会への参加を始めた。このときの活動は、日教組教職員会の

初めの全沖縄規模の教育研究活動において、いったい何をとりあげるべきか、議論の末、焦点として選択されたのは学力向上の問題であった。このことからも、今後の日教組の議論が反映されている。日教組の教職員会も、この出発時には、基礎学力の育成にどういったかを焦点と

なかったことなどがある。それらの活動を合せて、教職員会は学力向上の問題について考えられる。日教組教職員会は初、教室内の実践のために研究活動というより、実質的には

現状認識に基づいて、究極的には昇進を目的に教員の育成を図ることになる。日教組教職員会が行っている教職員の進路に関する研究活動としての教職員会・研究会の役割は、実質的には

冲縄県教職員会の組織係り合いを前提に、教職員会における組織の強化を求めての組織改革（九五四）が実施された。そして、文化活動に重点を置いていたのに対して、教職員会の改革（九五四）が実施された。だが、文化活動の強化は、政治的成果としての教育系の国家的機関としての役割を果たすために必要である。
学校外の要求に応じて設定されたものである。

がここに問題となったのが、肝心の「学力」の定義であること。

四年前半には、すでに「学力向上の方策と対策」を定義していた。

が、学力の定義がまとまったため、詳細の解釈をつけるため、特に学力の定義が不明確な時期が続いた。

九月初頭の時点で、学力の定義が定義されていた。

この間に、初めの学力の定義が明らかにされなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

その後、学力の定義が定義されなかった。

そこで、初めての学力の定義が明らかにされなかった。

しかし、初めての学力の定義が明ら
第三の小論文は「施設・設備の問題」を対象とし、「学力向上に資するため」という文脈に対して、施設設備の整備と活用について考察する。特に図書館や学習センターのような施設設備は、教師の教育活動、生徒の学習活動を支える重要な要素である。しかしながら、その整備や活用の実態は地域や学校によって大きく異なり、さらに地域の特性や学校のニーズに合わせて柔軟な対応が求められている。

第四の小論文は「児童生徒の問題」を対象とし、「学力を高めるために」、「教育のあり方を考察する」などを目的としている。特に、家庭環境や学校環境の影響が学力に大きく影響することが示されている。たとえば、家庭経済状況や親の教育意欲、学校の教育方法などが学力に大きく影響する。

第五の小論文は「学校の問題」を対象とし、「教育を改革するため」、「学校のあり方を考察する」などを目的としている。特に、教育のあり方や学校の組織、活動のあり方などが問題とされ、様々な視点から考察がなされている。

第六の小論文は「教育の問題」を対象とし、「教育のあり方を考察する」などを目的としている。特に、教育のあり方や学校の組織、活動のあり方などが問題とされ、様々な視点から考察がなされている。

第七の小論文は「地域の問題」を対象とし、「地域の教育を考察する」などを目的としている。特に、地域の特性や地域の教育活動のあり方などが問題とされ、地域の教育環境や地域の教育活動のあり方などが考察される。
第四分科会における基本の関心については、概要をききずに述べた。ここでは、研究集録の中の「地域社会の診断」というタイトルの領域に注目して、当時の教員が抱いていた地域像を探ってみた。

まず都市では、本島個別の地域周辺の環境が特に問題視されてい
る。五〇年代、地域の本格的な建設によって急激に膨張を始めた市
街地は、やがて都市地区の外観を整え始めていたが、中心を成す
のは、米軍相手のサービス産業や基地労働者向けの娯楽施設であっ
た。戦時中に都市形成がそうした産業に多くを負っている以上、そ
れらは都市の一部というよりは全体に偏在しており、住民、特に子
供への悪影響が懸念された。子供たちが作文に縫うように「勉強し
ている時、劇場から音楽がこの方に来る」と自然にあそびたくなる
ような娯楽の魅力は、学力向上に熱を入れる教員にとっては容易なら
ざる敵だった。

なかでも最大の脅威は、娼婦に「街娼」とその風俗が与える影
響である。中部の一地区（胡差・前原）では盛んに行われた娼婦、い
わゆる「特殊婦人」をめぐる調査と分析を見てみよう。同地区の中
区の調査では、当時の六割が奄美大島出身の女性との報告があ
る。「母性愛がない」「ぽけもののみたいにこしらえたあの面は動物的だ」と
は母娘の因である。奄美出身者は、五三年の奄美返還後は外国人扱いを受け、法
的にも著しく差別されていた。また奄美からの出稼ぎ者は、一般に
生活が困窮し、蔑視の対象になりやすかった。こうしたことが、娼
婦への厳しい視線をさらに増幅させていたと考えられる。

ところが中高生は、同時に娼婦を一種の必要悪として認めてい
た。ひとつは「ドルの獲得が出来る」。不幸な沖縄経済の補いにあ
る農民の窮乏化・難民化は、娼婦たちの稼ぐ「ドル」の威信を相応
的に高めていた。もうひとつは「パンバンがいかなかった」と人民が被
害をうける」から必要という、娼婦を法の保障と考える意見であ
資料から残らないものの、集落での米軍侵攻や帰婦の悲劇、子供たちの行等は後を絶たず、中部部では特にそれが激しかった。子供たちに価値を与えて、一般の女性が助けるための犠牲として、その側で行われたのだろう。このように、子供たちの帰婦への希望は皆無であり、その根絶かしのための審裁判決がなされた。これは真剣に論じられたけれど、新たな次年度の設定の変更に巡る。会場では、女性の人権を尊重するという根拠によって、正当化をもってその設定を要求している。彼が言うところに、女性の人権擁護の立場から反対を唱える者は、この意味で報告書を正式に意見として打ち出さなかった。一方、指標が重要な段階を過ぎると、影響は大きいか、彼等も人間であり、発表する特有に、在る」という在職が報告するか、この段階に段时间を経て、人事地所に異を唱える。これでは報じられているが、女性の人権擁護の立場から反対を唱える者は、この理由で報告書を正式に意見として打ち出さなかった。一方、指標が重要である段階を過ぎると、影響は大きいか、彼等も人間であり、発表する特有に、在る」という在職が報告するか、この段階に段时间を経て、人事地所に異を唱える。
子供の学力向上を図るためには、それを妨害する原因を地域社会

三
言語と学力

もっとも根本的な解決策として挙げられたのは、沖縄社会全体の「経済の振興」とそのための諸設備の充実、家庭の「封建的」意識を改善するための啓蒙である。

五〇年代、教員は自分たちの努力にもかかわらず向上しない学力

の原因を地域に見ていた。そうした認識は、社会教育や環境浄化activitiesなど、事態の改善につながる施策を打ち出すために必要な調査・

分析をもたらしたが、それは同時に、地域に対する個別の不満が、

やがて地域社会全体が抱える問題として教員のなかで明確化する過

程でもあった。

しかも、都市と農村とのすさまじい落差など、上述の問題の多く

は職員会の力だけでは解決できない。教員たちは、やがて沖縄全

体の近代化・合理化による解決に期待していく。五〇年代末から教

職員会が新生活運動や「母親と教師の会」の活動へと向かう内

の動因は、すでにこうしたところに萌芽が認められる。

では、子供を見る際に、こうした学力の包括性に沿うもう一つの有

効な指標は何か。それが第一次教員集会で一・分科会の全部を費やし

て論じられた。もっとも深い記録を残した言語の問題であった。その

と、教員が地域社会との連携をいかに効果的に求めていたかがわかる。

教員が地域社会との連携を、言語に注目することから、その教員が地域

社会との関係において、言語の問題をどう捉えるかが問題である。一・

分科会では、「標準語を学ばせ、標準語を学ばせ、標準語を学ばせ、

標準語を学ばせ、標準語を学ばせ」の原因を検討する必要がある。そして

これからの段階で、地域社会を理解し、地域社会との連携を求めるため

の、地域社会を理解し、地域社会を理解し、地域社会を理解し、地域社会

を理解するためには、言語を学ばせ、標準語を学ばせ、標準語を学ばせ、

標準語を学ばせ、標準語を学ばせ」の学力向上のための必要とされる

ことである。
ギャップを生んでいる。この『文化の負債』が学力低下の要因だと

気が立つ。しかし、負債は本土との比較のみならず、言葉で

いるのでもある。『沖縄方言』などと呼ぶと、時には恥ずか

ない。沖縄の言語環境は複雑な面相が浮かび上がっている。

教員は、自分たちが平素使用している言語を問題視する

わけではない。それが、『間違ってはならない』ことと証明された。「ここに

伝えられ、教員は得た得て、言語使用の相関性を認められていたものの、漠然としていた。今回の調査

で、教員は自分の出身地の実情への意図を駆り立てられたと

伝える。方言という、『仮に使われる道具』が、一方言

こうして対策は、本土だけでなく地域社会を巻き込んだ広範さを

持つことになる。主な項目は、学校布告、生活日記を記入させ教員が毎日検査する、朗読劇等で

指導する。生活日記を記入させ教員が毎日検査する、朗読劇で

学校布告も存在する。
表の配布、母語学級における指導が、地域社会では標準語励行ポケースターの作成、各商店との連絡・協力（売っても買う）標準語通語に教員の各集会への参加と使用促進などがそれぞれ考案されている。新しいうちの戦前の方言撲滅の掛け声が人々に与えた恐怖を教員自身も感じており、かつ戦後の本土における国語教育の授業方法を再考している。

一方の県会では、敷地は言語指導に対する地域からの反発を当然把握していた。新しいうちの戦前の方言撲滅の掛け声が人々に与えた恐怖を教員自身も感じており、かつ戦後の本土における国語教育の授業方法を再考している。一方の県会では、敷地は言語指導に対する地域からの反発を当然把握していた。

一方の県会では、敷地は言語指導に対する地域からの反発を当然把握していた。一方の県会では、敷地は言語指導に対する地域からの反発を当然把握していた。一方の県会では、敷地は言語指導に対する地域からの反発を当然把握していた。一方の県会では、敷地は言語指導に対する地域からの反発を当然把握していた。一方の県会では、敷地は言語指導に対する地域からの反発を当然把握していた。
導は極めて大切である。と対策は、先生の前だけ標語という子供たちの面倒見がきつい。予定をまず根拠のとされる感情の水準から、標語を自然なものと見なすように誘導するための方法として導き行われている。

注意しておきたいが、この場合では後国民教育科会での議論のように標語強行を復帰の足かりにするように誘導しない。標語の動員・指導は、教員の復帰を向う内にある同様の論理へと連続するものとして従来からの挙げられてきた確かな必要がある。標語の動員・指導は、必ずしも常に同じの論理で説明されるわけではない。当時指導理由を見つける限りは、再国民化による主権の顕在化を目的に接続する説明はほとんどなく、実際に、日本人では、その時、言語の役割を模索し、国の文化を模索し、文の規律化す

四「学力」への問いと教科会の行方

教科会の変化は、第一次教科方針を設定する際に議論された「学力」の内実と密接にかかわっていた。この点に当時の沖縄のイムズの社会は示唆に富む。すでに教科会が中心部を流れる有を求めるようの上意に達する
傾向を問題にしてい。また各研究会の主な問題設定から想定される問
題と対策は、「教員研究大会をまとめないべし」と、診断の見通し
が不十分である。『読書・書類』の意義なのか、あるいは Desti
テートで計測される学力なのか、『きばりがわからない』と難読し、観
念の包括的な課題設定を批判している。

当時、この酷評を否定できる教員はいなかった。内部資料
が散逸しているため、詳細な経過は追えないので、唯一の正史『沖縄教
職員会十六史』によれば、会員からも実態調査の担当者たる人
事前も、如何に『教員の見解が上手に表現されるように、現場の教
研会の報告が雄弁に物語るように、現場の教員が『実際の指導に役立
たない』との批判が多かったようだ。第一次

三次教員活動を一向に進められないか。一方では、教員が実態調査の担当者たる人
事前も、如何に『教員の見解が上手に表現されるように、現場の教
研会の報告が雄弁に物語るように、現場の教員が『実際の指導に役立
たない』との批判が多かったようだ。第一次

三次教員活動を一向に進められないか。一方では、教員が実態調査の担当者たる人
事前も、如何に『教員の見解が上手に表現されるように、現場の教
研会の報告が雄弁に物語のように、現場の教員が『実際の指導に役立
たない』との批判が多かったようだ。第一次

三次教員活動を一向に進められないか。一方では、教員が実態調査の担当者たる人
事前も、如何に『教員の見解が上手に表現されるように、現場の教
研会の報告が雄弁に物語のように、現場の教員が『実際の指導に役立
たない』との批判が多かったようだ。第一次
針は、明らかにそれまでの教員集会の否定ないしは大幅な修正を
示した方針に寄り添いつつ、教員たちもその後はむしろ教育実
践のための技術を磨く場として教員活動を位置づけていく。各地
区各教科ごとに同好会組織が生まれ、日常的な研鑽の積み上げが
教員集会に反映される態勢が整える。島るるみ闘争と併行して
闘う教員会の活動が実現される。二年後の上期には教員集会の
報告が行われる。}

その一方で、教員集会の機能を忘れずに、教員活動がなければ
教員会の活動は実現しない。それは、教員活動を通じて教員集会
の機能を維持し、教員会の活動が実現することである。教員活動
を通して教員集会の活動が実現され、教員会の活動が実現されること
である。

一方で、教員集会の機能を忘れずに、教員活動がなければ
教員会の活動は実現しない。それは、教員活動を通じて教員集会
の機能を維持し、教員会の活動が実現することである。教員活動
を通して教員集会の活動が実現され、教員会の活動が実現すること
である。
日本の地名は、日本全国において広く使われています。特に、地図や地名辞典などによると、各地に多く使われています。

日本は、地名の一部として、地名の一部として、日本全国において広く使われています。特に、地図や地名辞典などによると、各地に多く使われています。